

大学英語教育学会（JACET）中部支部 2019 年度秋季定例研究会プログラム

日時：2019 年 11 月 16 日(土) 13 時 10 分～17 時 20 分

会場：愛知大学 名古屋キャンパス 講義棟 4 階 L405 講義室

〒453-8777 名古屋市中村区平池町 4-60-6

あおなみ線「ささしまライブ」駅下車 歩行者デッキ直通 徒歩 2 分

開会挨拶	13 時 10 分～13 時 15 分	支部長 石川有香(名古屋工業大学)
実践報告 1	13 時 15 分～13 時 45 分	司会 村田泰美(名城大学)
Learners' beliefs about error logs		Jane Hislop & Christopher Adam Lear (Nagoya University of Foreign Studies)
実践報告 2	13 時 50 分～14 時 20 分	司会 倉橋洋子(東海学園大学)
英語専攻の学生に対する「アメリカ文化」授業の試み		地村みゆき(愛知大学)
研究会研究発表	14 時 25 分～15 時 05 分	
【授業学研究会(中部)】 学習者間の「対話」に注目する		佐藤雄大・森 明智(名古屋外国語大学)
休憩	15 時 05 分～15 時 20 分	
支部総会	15 時 20 分～15 時 30 分	
シンポジウム	15 時 35 分～17 時 15 分	司会 石川有香(名古屋工業大学)
大学英語教育の新展開		
拡大学習の一事例 ——多角的視点を目指して——		木村友保(名古屋外国語大学名誉教授)
オールイングリッシュとバイリンガル授業 ——認知脳科学から見た主体的, 対話的, 深い学び——		大石晴美(岐阜聖徳学園大学)
大学英語教育の芯なき転回——大学英語教育学は虚像か実像か——		大森裕實(愛知県立大学)
閉会挨拶	17 時 15 分～17 時 20 分	副支部長 佐藤雄大(名古屋外国語大学)

発表概要

実践報告 1 13 時 15 分～13 時 45 分

Learners' beliefs about error logs

Jane Hislop & Christopher Adam Lear (Nagoya University of Foreign Studies)

This presentation investigates learners' beliefs about error logs which combine uncoded, focused corrective feedback for subject-verb agreement and singular/plural noun ending errors. This was a longitudinal, qualitative study of 48 university English majors enrolled in a second-year, semester-long academic writing course in Japan. Students submitted three essays over the course of the semester and were tasked with completing an error log based on any subject-verb agreement or singular/plural inaccuracies in their second drafts. At the end of the semester, students wrote a reflection in which they gave their views concerning various aspects of the error logs. Overall, students held positive beliefs about using error logs.

実践報告 2 13 時 50 分～14 時 20 分

英語専攻の学生に対する「アメリカ文化」授業の試み

地村みゆき(愛知大学)

英語学習者にとって、英語圏文化に関する知識の習得は不可欠である。報告者はアメリカ研究を専門とする大学英語教員である。今年度前期に報告者が英語専攻の学生に対して行った「先住民の視点から読み解くアメリカ社会」の授業について実践報告する。この授業の狙いの一つは、英語や英語圏文化にあこがれを抱く学生と共に、英語の資料を用いてアメリカ史の諸事象を学ぶことで、英語という言語が持つ植民地主義的側面に気づきを促しながらも、英語という言語が可能にするコミュニケーション手段の広がりや再認識させることである。本報告では具体的な授業内容を紹介した後、授業評価アンケートと毎回の授業後のコメントで得られた学生の反応を報告する。授業の特性上、扱う情報量が膨大であったためか、学生は先住民の土地強奪過程や現代社会の人種問題に関心を寄せ、英語が持つ植民地主義的側面について特にコメントすることはなかった。しかし、英語の史料や映像資料を用いて授業を行い、学生が普段ほとんど触れることのないであろう話題について議論を行うことで、英語や英語圏文化への更なる興味を引き出したことは分かった。

研究会研究発表 14 時 25 分～15 時 05 分

【授業学研究会(中部)】

学習者間の「対話」に注目する

佐藤雄大・森 明智 (名古屋外国語大学)

思考は「イメージ」あるいは「内言」であり、それを「対話」の中で外言化することで人は交流(コミュニケーション)し、さらに思考を高度化させていくとヴィゴツキーが述べているが、このような「対話」の役割に着目することで学生の英語学習に貢献できることが多々あると考えられている。はじめに対話を利用した「ジグソー法」の実践を紹介し、その後リーディングストラテジーに関する研究を報告する。特にリーディングストラテジーに関しては語彙や文法を含むストラテジー使用の改善の試みとして Collaborative Strategic Reading (Klingner & Vaughn, 1999: 2000)を利用し L1 を用いた学習者間の議論を許可する指導を行った結果を報告する。

シンポジウム 15 時 35 分～17 時 15 分

大学英語教育の新展開

拡大学習の一事例 ——多角的視点を目指して——

木村友保(名古屋外国語大学名誉教授)

2014 年 4 月から 2018 年 12 月 17 日までに大使館が日本にある 97 カ国から大使、副大使、一等書記官など外交官を招いて、毎週一回の割で英語の講演会を実施した。2016 年 4 月からはそれを拡大して、今度は学生を連れて、大使館を訪問し、そこで学生が英語のプレゼンを行ない、外交官と英語でディスカッションを行った。2018 年 10 月 15 日にはそれをさらに拡大して、ある地域の 4 つの大使館からすべての大使をお招きして、大使の前で学生の研究発表を英語で行なわせた。以上の活動で分かったことは、国の大小を問わず、

どこの国の大使も、自分の国を見事に紹介する英語のモデル的使い手であること、外交官の語るメッセージとメディアを通して入手できるものとは必ずしも一致しないこと、そして最終的には各国を正しく理解するためには自分で研究し、自分で考えることが不可欠であるということだった。

オールイングリッシュとバイリンガル授業 ——認知脳科学から見た主体的、対話的、深い学び——

大石晴美(岐阜聖徳学園大学)

オールイングリッシュ授業とバイリンガル授業には、それぞれどのような効果があるのだろうか。文科省による学習指導要領では、「英語の授業は英語で行うことを基本とする」とされ、さらに「生徒の理解の程度に応じた英語を用いるようにすること」も追記されている。重視すべきことは学習者の理解である。教員が授業で英語を多く使うことに重点を置かれるのではなく、学習者がどれだけ多くのインプットが得られるかに注目することが重要である。インプットを得ることで学習者の認知力が活性化する。昨今、教員養成系の大学では、「英語で英語の授業ができる」人材の養成が求められている。本講では、まず、英語の授業における、英語と日本語の役割に焦点をあて認知脳科学的立場から論じる。そして、学習者がより主体的、対話的、深い学びを実現するため、効果的な英語授業の展開および教員養成につなげる。

大学英語教育の芯なき転回——大学英語教育学は虚像か実像か——

大森裕實(愛知県立大学)

本講師が JACET 中部支部大会(2002.6.1)シンポジウム「21 世紀における総合的英語教育」のパネリストを務めて「教養主義と実用主義の相即相入関係」(中部応用言語学研究会『言語研究と英語教育』第 6 号に所収)を提議してから 17 年余りが経過したが、大学英語教育が必ずしも新しい局面を迎えたとは思われない。また、教養教育の重要性が再び強調されるようになったにもかかわらず、その一環としての外国語科目における実用英語指導偏重も目に余る。最近脚光を浴びる CLIL は、日本では専門分野の教員が目標言語で教えるのではなく、英語教員が付焼き刃で内容を理解して教えるが、高等教育機関ではそれは適当か。やはり、それぞれの専門を活かした授業とカリキュラム構築こそが大学英語教育を活性化させる“旧くて新しい途”であろう。

【講師紹介】

木村友保(きむら ともやす)

2008 年から 2010 年まで大学英語教育学会中部支部長。2006 年 JACET 実践賞受賞。愛知県の公立高校で 22 年間英語教師として勤務した後、名古屋外国語大学に移り、2019 年 3 月まで 19 年間勤務、英語教育担当主任として定年退職。『現代英語クロニクル』を 2004 年から 2008 年まで現代国際学部から、2011 年から 2015 年までは国際ビジネス学科から出版。2001 年から 2011 年まで愛知県教育総合センターで英語教員の 10 年目研修会講師を務めた。

大石晴美(おおいし はるみ)

岐阜聖徳学園大学教育学部・同大学院国際文化研究科教授。2012 年から 2014 年まで大学英語教育学会中部支部長。2005 年 JACET 学会賞(新人賞)受賞。著書『脳科学からの第二言語習得論』(昭和堂)(単著)、『よくわかる社会言語学』(ミネルヴァ書房)(共著)などがある。専門は英語教育学、第二言語習得。

大森裕實(おおもり ゆうじつ)

愛知県立大学外国語学部英米学科・同大学院国際文化研究科教授。大学附置「通訳翻訳研究所」所長。2015 年から 2017 年まで大学英語教育学会中部支部長。JACET では本部理事を通算 7 年務めた。現在 JACET SIG on“最新言語理論に基づく応用英語文法”代表。専門は歴史言語学、英語学(含:日英比較対照研究)、機能主義言語学。

事務局からのお知らせ

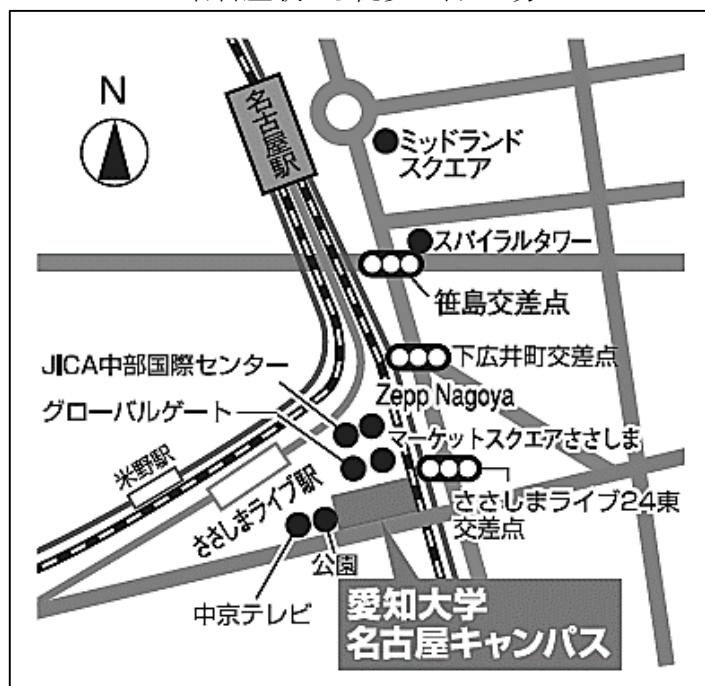
- ☆ 駐車場はありません。公共交通機関をご利用下さい。
- ☆ 当日、第6回中部支部役員会(11:30~12:30)を行います。役員は講義棟4階L403議室にご参集下さい。
- ☆ 2019年度春季定例研究会を2020年3月7日(土)に名古屋外国語大学にて開催します。研究発表募集は12月1日(土)より開始します。中部支部ホームページ<http://www.jacet-chubu.org/reikai.html>よりお申し込みください。

会場アクセス

愛知大学 名古屋キャンパス 講義棟4階 L405 講義室
〒453-8777 名古屋市中村区平池町 4-60-6
あおなみ線「ささしまライブ」駅下車 歩行者デッキ直通 徒歩2分



名古屋駅から徒歩で約15分



定例研究会に関するお問い合わせは、JACET 中部支部事務局までお願いします。

支部事務局: 豊田工業大学 伊東田恵研究室内
tac@toyota-ti.ac.jp